

目次

虐殺の少年たち

7

訳者あとがき
256

I ragazzi del massacro
1968
by Giorgio Scerbanenco

ミケーレとアダ・ピレツリの娘である女教師マティルデ・クレシエンツァーギは未婚で、夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校にて、十三歳から二十歳までの子が混在する学級を教えていた。生徒の大部分は鑑別所送りの経験があるか、父親がアル中、母親が売春に勤しんでいる等の境遇にあり、種々の結核に冒された者や先天性梅毒の者もいた。こんな学級は、北イタリアの中産階級ブチブブルで育つたか弱く感受性の強い女教師ではなく、外国人部隊の上級軍曹にでも任せておくべきだったのに――。

ミケーレとアダ・ピレツリの娘である女教師マティルデ・クレシエンツァーギは未婚で、夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校にて、十三歳から二十歳までの子が混在する学級を教えていた。生徒の大部分は鑑別所送りの経験があるか、父親がアル中、母親が売春に勤しんでいる等の境遇にあり、種々の結核に冒された者や先天性梅毒の者もいた。こんな学級は、北イタリアの中産階級ブチブブルで育つたか弱く感受性の強い女教師ではなく、外国人部隊の上級軍曹にでも任せておくべきだったのに――。

「五分前に亡くなりました」

ドゥーカ・ランベルティは、シスターの肩越しに、マスカランティのいかつい顔が曇るのを見たが、何も言わなかった。

「それでも、お会いになりますか？」シスターが訊いた。二人が女教師に事情を聴こうとやってきたのはわかっていたが、死人への尋問というのは無理がある。

「はい」ドゥーカが答えた。

掛け布団は剥がしてあり、哀れな女教師はくたびれた時代遅れの黄色いベビードールを着ていた。顔は苦痛で歪み、右目の下には内出血、変形した額からは、無残にも髪の毛がこっそり引き抜かれ、滑稽なほど不自然な禿ができてきている。腫れた胸部には応急処置のギプスが巻かれていたが、折れた肋骨の痛みを抑えるためにすぎなかった。骨折は全部とはいえないが無数にあり、どのみち外科医にはいちいち数える暇いとまはなかっただろう。

小男の押すいわゆる霊柩担架が、すでに到着していた。ありふれたストレッチャーだが、シーツの代わりにグレーの防水布で覆われている。遺体はこれに載せられたまま冷蔵庫へと運ばれ、検死の許可を待つことになる。担架の脇には制服警官もいて、ドゥーカの姿を認めると、帽子の庇におおず

と手をかけ、挨拶した。まだ若く純朴そうな青年は、警官らしからぬ感極まった声を発した。「死んでしまいました」汗ばんだ両手を背中に回し、片手ずつ放した。この青年が警官になったのはまちがいであったかもしれない。「最後にもう一度、『校長先生！』と叫んで、息絶えました」

ドゥーカは近づいて、犯罪者らがこの哀れな生き物——ミケーレとアダ・ピレツリの娘、マティルデ・クレシエンツァーギ、二十二歳、ミラノ市イタリア通り六番地居住、独身、ヴェネツィア門にある夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校に所属、(可能なかぎり) 礼儀作法を含む各種学科の教師——が被った身の毛もよだつ損傷を見つめた。細かくちぎれた左手の小指は、バラバラにならないよう、なんとかプラスチックのプレートでつなげてある。全身のあらゆるところが潰れたり折れたりしているため、より深刻な箇所の治療を優先させたのだろう。たとえば、警察から連絡を受けた母親がすぐ病院へ持参したという黄色いベビードールのズロースは、股の付け根あたりがふくらんでいて、分厚い脱脂綿が透けて見える。ほかにもあちこちに湿布が貼ってあり、まるで列車に轢かれたような惨状だ。

「母親はショック状態で、まだ亡くなったことも知りません」後ろにいたシスターが言った。

そう、ほんの数分前に、「校長先生」と叫びながら死んだのだ。戦前には、「統帥ドクトル！」とか、「黒シヤツを着せてくれ」と叫びながら死んだという話もあったが、もちろん、一般的には「マンマ」と叫んで死ぬ者の方が多かった。この女教師は「校長先生」と、勤務先の上司に哀願しながら逝ったのだ。これも悲しすぎる。

「母親にはいつ話を訊けるでしょう？」ドゥーカは不幸な生き物から目を上げ、できれば二度と視線をもどしたくないと思いつながら、シスターに尋ねた。

「先生に伺ってみますが、明日の夕方より前は無理でしょう」

「ありがとうございます」

病院の外に出たドゥーカとマスカランティは、歩道の端で凍てつく霧につつまれ立ち止まった。まるで猿轡をはめられたようで、見えるのは街灯ひとつと、通りの反対側で待つ警察のアルファロメオの青色灯だけ。あとは灰色の闇だ。騒音までがくぐもって聞こえ、窒息しそうだった。

「あのバカ、なんだって反対側に停めるんだ」とマスカランティ。「真ん前で待ってればいいものを。さて、道を渡らなきゃなりませんよ」この霧では、女物のハンカチを振りかざしたって、無事渡れるとはかぎらない。

「一方通行だね」とドゥーカ。

「ああ」マスカランティは苦笑いした。「交通法規を守るのは、われわれ警察の人間だけですよ」

広い通りを注意深く渡っていく。重く濃い霧の中、ときどき時速十キロで走る車のヘッドライトが光った。通りの反対側に着き、アルファロメオの青い点滅が近づくと、マスカランティが言った。「すみません、先生。何か飲みたいんですが」警官として、人生のあらゆる場面を見てきた男だが、あの女教師の死にざまを見てしまった後では、一杯やらすにはいられないのだろう。たぶん、ただ怒りを爆発させないために。

「わたしもだ」ドゥーカが応じた。

歩道を歩いて角までいくと、纏わりつく冷たい霧の向こうに、青白い軽食堂のネオンサインが見えた。

「寒くありませんか、ランベルティ先生？」

確かに少し寒かった。コートも帽子もマフラーもなく、バリカンで刈った坊主頭で冷たい霧のシャワーを浴びているのだから。だが、あの女教師を見ていなかったらこれほど、いや、寒さなど感じていなかったかもしれない。

「ああ、少し寒いね」軽食堂の扉を開けるマスカラランティに言った。「わたしはグラッパを飲もう。きみは？」

「わたしはダブルで」

「グラッパをダブルで二つ」ドゥーカがカウンターの後ろの女の子に言った。その子の痩せた首を見つめていると、物憂げな慣れた手つきで棚からグラッパを探しだし、ボトルをつかんで大きなグラスに注いでくれた。

ちびちび飲み続けながら、腹の出た大男がジュークボックスの前で立ち止まるのを見ていた。やがてボタンを二つ押す。禿げて太った年輩の男が選んだのはカテリーナ・カゼツリ（「ビートの女王」といわれた六〇年代の人気歌手。現在はアンドレア・ボチエツリなどのプロデューサー）の曲。だが、その瞬間、ドゥーカの目には何も映らなくなった。目は開いているのに、同じようにちびちびやっているマスカラランティも見えないし、まわりのものは何も目に入らない。ただ、パノラマサイズのスクリーンに、もはや意味もない大量の包帯が巻かれ、古くさい、いや本人にとつてはモダンな、黄色いベビードールをまとった女教師の遺体のみが、くつきりと映っていた。「酷いことを」病院のベッドに横たわる変わり果てた姿、険に映しだされる悲しすぎる映像を見つめながら、ひとり呟く。首を振り、グラッパを飲み干した。餓えた鼠でいっぱい穴蔵に落ちたとして、あれほど凄まじいことにはならないだろう。「野獣なのか」また首を振り、ようやくジュークボックスの前の太った男とマスカラランティが目に入った。「行こう」

霧の中、アルファロメオの青色灯を頼りに歩いた。

「どこへ行きますか」とマスカランテイ。

「学校だ」とドゥーカ。

「五分前に亡くなりました」

ドゥーカ・ランベルティは、シスターの肩越しに、マスカランティのいかつい顔が曇るのを見たが、何も言わなかった。

「それでも、お会いになりますか？」シスターが訊いた。二人が女教師に事情を聴こうとやってきたのはわかっていたが、死人への尋問というのは無理がある。

「はい」ドゥーカが答えた。

掛け布団は剥がしてあり、哀れな女教師はくたびれた時代遅れの黄色いベビードールを着ていた。顔は苦痛で歪み、右目の下には内出血、変形した額からは、無残にも髪の毛がこっそり引き抜かれ、滑稽なほど不自然な禿ができてきている。腫れた胸部には応急処置のギプスが巻かれていたが、折れた肋骨の痛みを抑えるためにすぎなかった。骨折は全部とはいえないが無数にあり、どのみち外科医にはいちいち数える暇いとまはなかっただろう。

小男の押すいわゆる霊柩担架が、すでに到着していた。ありふれたストレッチャーだが、シーツの代わりにグレーの防水布で覆われている。遺体はこれに載せられたまま冷蔵庫へと運ばれ、検死の許可を待つことになる。担架の脇には制服警官もいて、ドゥーカの姿を認めると、帽子の庇におおず

と手をかけ、挨拶した。まだ若く純朴そうな青年は、警官らしからぬ感極まった声を発した。「死んでしまいました」汗ばんだ両手を背中に回し、片手ずつ放した。この青年が警官になったのはまちがいであったかもしれない。「最後にもう一度、『校長先生！』と叫んで、息絶えました」

ドゥーカは近づいて、犯罪者らがこの哀れな生き物——ミケーレとアダ・ピレツリの娘、マティルデ・クレシエンツァーギ、二十二歳、ミラノ市イタリア通り六番地居住、独身、ヴェネツィア門にある夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校に所属、(可能なかぎり) 礼儀作法を含む各種学科の教師——が被った身の毛もよだつ損傷を見つめた。細かくちぎれた左手の小指は、バラバラにならないよう、なんとかプラスチックのプレートでつなげてある。全身のあらゆるところが潰れたり折れたりしているため、より深刻な箇所の治療を優先させたのだろう。たとえば、警察から連絡を受けた母親がすぐ病院へ持参したという黄色いベビードールのズロースは、股の付け根あたりがふくらんでいて、分厚い脱脂綿が透けて見える。ほかにもあちこちに湿布が貼ってあり、まるで列車に轢かれたような惨状だ。

「母親はショック状態で、まだ亡くなったことも知りません」後ろにいたシスターが言った。

そう、ほんの数分前に、「校長先生」と叫びながら死んだのだ。戦前には、「統帥ドクトル！」とか、「黒シヤツを着せてくれ」と叫びながら死んだという話もあったが、もちろん、一般的には「マンマ」と叫んで死ぬ者の方が多かった。この女教師は「校長先生」と、勤務先の上司に哀願しながら逝ったのだ。これも悲しすぎる。

「母親にはいつ話を訊けるでしょう？」ドゥーカは不幸な生き物から目を上げ、できれば二度と視線をもどしたくないと思いつながら、シスターに尋ねた。

「先生に伺ってみますが、明日の夕方より前は無理でしょう」

「ありがとうございます」

病院の外に出たドゥーカとマス克蘭ティは、歩道の端で凍てつく霧につつまれ立ち止まった。まるで猿轡をはめられたようで、見えるのは街灯ひとつと、通りの反対側で待つ警察のアルファロメオの青色灯だけ。あとは灰色の闇だ。騒音までがくぐもって聞こえ、窒息しそうだった。

「あのバカ、なんだって反対側に停めるんだ」とマス克蘭ティ。「真ん前で待ってればいいものを。さて、道を渡らなきゃなりませんよ」この霧では、女物のハンカチを振りかざしたって、無事渡れるとはかぎらない。

「一方通行だね」とドゥーカ。

「ああ」マス克蘭ティは苦笑いした。「交通法規を守るのは、われわれ警察の人間だけですよ」

広い通りを注意深く渡っていく。重く濃い霧の中、ときどき時速十キロで走る車のヘッドライトが光った。通りの反対側に着き、アルファロメオの青い点滅が近づくと、マス克蘭ティが言った。「すみません、先生。何か飲みたいんですが」警官として、人生のあらゆる場面を見てきた男だが、あの女教師の死にざまを見てしまった後では、一杯やらすにはいられないのだろう。たぶん、ただ怒りを爆発させないために。

「わたしもだ」ドゥーカが応じた。

歩道を歩いて角までいくと、纏わりつく冷たい霧の向こうに、青白い軽食堂のネオンサインが見えた。

「寒くありませんか、ランベルティ先生？」

確かに少し寒かった。コートも帽子もマフラーもなく、バリカンで刈った坊主頭で冷たい霧のシャワーを浴びているのだから。だが、あの女教師を見ていなかったらこれほど、いや、寒さなど感じていなかったかもしれない。

「ああ、少し寒いね」軽食堂の扉を開けるマスカラランティに言った。「わたしはグラッパを飲もう。きみは？」

「わたしはダブルで」

「グラッパをダブルで二つ」ドゥーカがカウンターの後ろの女の子に言った。その子の痩せた首を見つめていると、物憂げな慣れた手つきで棚からグラッパを探しだし、ボトルをつかんで大きなグラスに注いでくれた。

ちびちび飲み続けながら、腹の出た大男がジュークボックスの前で立ち止まるのを見ていた。やがてボタンを二つ押す。禿げて太った年輩の男が選んだのはカテリーナ・カゼツリ（「ビートの女王」といわれた六〇年代の人気歌手。現在はアンドレア・ボチエツリなどのプロデューサー）の曲。だが、その瞬間、ドゥーカの目には何も映らなくなった。目は開いているのに、同じようにちびちびやっているマスカラランティも見えないし、まわりのものは何も目に入らない。ただ、パノラマサイズのスクリーンに、もはや意味もない大量の包帯が巻かれ、古くさい、いや本人にとつてはモダンな、黄色いベビードールをまとった女教師の遺体のみが、くつきりと映っていた。「酷いことを」病院のベッドに横たわる変わり果てた姿、険に映しだされる悲しすぎる映像を見つめながら、ひとり呟く。首を振り、グラッパを飲み干した。餓えた鼠でいっぱい穴蔵に落ちたとして、あれほど凄まじいことにはならないだろう。「野獣なのか」また首を振り、ようやくジュークボックスの前の太った男とマスカラランティが目に入った。「行こう」

霧の中、アルファロメオの青色灯を頼りに歩いた。

「どこへ行きますか」とマスカランテイ。

「学校だ」とドゥーカ。

ロレート広場から近い夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校は、中世の館様式で建てられた庭付きの古い二階屋だ。ひと頃、屋敷といえばまだ田園地帯だった市街のはずれに建てるが多かったが、今やここも、十階、十五階、二十階もの高層建築に囲まれている。校舎は通りから奥まったところがあり、小さな広場を形作っていた。霧に紛れてパトカーが一台、ヘッドライトを門に向けているため、夜間定時制アンドレア&マリア・フスターニ校と記された真鍮の表札が光って見える。歩道に腰を下ろした見張りの兵士が四人、コートの襟を耳まで引き上げて眠りこけたカメラマンが一人、それに、たぶん一般人と思われる若者が三、四人いた。見せ物じゃあるまいし、こいつら何だ、野次馬じゃないだろうな。アルファロメオから降りながら、ドゥーカは思った。

カメラマンが目を覚まし、こちらへ駆けてきた。霧の向こうからドゥーカを見つけ、アルファロメオを見てから言った。「署からですか？ 何かわかったんですか？」

ドゥーカは答えず、マスカーンティがカメラマンの腕をつかんだ。「帰ってください。ここで取材はできませんよ」

「中の写真を撮らせてください、一枚でいいから」カメラマンは必死に訴える。「黒板が卑猥な言葉と猥褻な絵で一杯なんですよ。どうせ撮影はできやしない。どこの社も掲載してくれませんかね。」

だから教壇だけでいいんだ。黒板を背景にね。絵はほかすし、言葉は読みとれないようにしますから一枚だけ。お願いしますよ、巡査部長」

マスカランティがカメラマンを追いかつていゝるあいだに、ドゥーカは兵士の案内で校舎に入った。A教室は入口からすぐの一階にある。階段の左には、管理人用のちいさな二部屋があり、夫妻はすでに外に出て待つていた。他の教室のある二階へと続く階段のわきで、疲れはて、悲しみに暮れ、神経をすり減らした老夫婦は、すでに四十八時間も前から、彼らの人生に降つて湧いた大惨事に打ちのめされていた。そして、階段の右にはA教室——一般教養——に当てられた大部屋があり、別の兵士が見張つてゐる。

「どうぞ、お部屋にもどつてください。あなたがたに、いていただく必要はありません」ドゥーカは管理人の小男と老妻に言った。その間に兵士がドアを開け、ドゥーカはマスカランティとともにA教室へ入つた。天井を斜めに横切る二本の蛍光灯が室内を照らしている。何もかも二日前の夜のまゝ、管理人夫妻によつて発見されたときと変わらない。ただ、鑑識によつて若干手が加えられている。細長い窓は黒い布で覆われ、細い板で×印に封鎖してあつた。これはカメラマンやジャーナリストへの対抗措置である。というのも、教室は一階にあり、窓は中庭と呼ばれる数平方メートルの凍つた土地に面していた。中庭に立てば、背の低い者でも教室の中をのぞくことができる。実際には、まず鉄格子、次に窓ガラス、室内には巻き上げ式のよろい戸があるのだが、写真を撮ろうとしたカメラマンが外からガラスを割り、よろい戸を上げようとして取り押さえられたため、同じことが起こらないよう、窓が塞がれたのだ。

「見取り図を」ドゥーカ・ランベルティは黒板の前に立ち止まつた。マスカランティは鞆を探ると、

見取り図と呼ばれた白い紙切れをすぐに見つけ、手渡した。

ドアから三步のところに突っ立ったまま、ドゥーカは黒板から目を離し、教室には不似合いな鑑識の痕跡に目を配った。白いペンキで描かれた大小の○印。小さいのはテーブルについたコップの跡ぐらい、大きいのは籐で覆ったワインの大瓶の円周ぐらいだ。それぞれの○の中には二十ほど、いや正確にいうと、紙切れにタイプされたのと同じ②までの数字が、書いてあった。つまり、見取り図には、虐殺発覚直後に教室で発見された物体と、その発見場所が示されている。

白い○は至るところにあった。黒板の前の教卓、床、生徒の席となっていた四台の長テーブル、壁——色が白に近いため、○はこだけ、黒いペンキで描かれている。

「タバコをくれないか」ドゥーカは○印から目を離さず、マスカランティの方に手だけ伸ばした。今、見つめているのは⑬だ。

「はい、先生」マスカランティはタバコを渡し、火を点けてくれた。

ドゥーカは見取り図に目を落とし、⑬を見た。⑬のところには「酒瓶」と書いてある。床の④に目を移す。見取り図では④は「金の十字架」。おそらく生徒の持ち物」。④は、床にやはり速乾性のペンキで描かれた人の輪郭、そう、女教師マティルデ・クレシエンツァーギの輪郭のそばにあった。

ドゥーカはタバコをくわえたまま吹かし続け、吸い殻が唇に触れそうになると床に捨てた。そうして見取り図の○印を一つずつ確認していく。①は「人体。マティルデ・クレシエンツァーギの輪郭」。⑬は「酒瓶」。

「タバコを」また頼んだ。

教卓の後ろの硬く座り心地の悪い椅子に腰かけ、タバコを吸いながら教室をながめた。椅子が四脚

ずつ並んだ長テーブルが四台ある。あの特異な生徒たちが学んでいた机だ。再び見取り図を見て、⑧の「尿」に目を留めた。一人だけでなく、複数の生徒——そう呼べるなら——が部屋の隅で小便をしていた。おかげで、熱い人道主義に貫かれた慎ましくも良心的な学舎まなびやは、吐き気を催す畜舎と化していた。

マスカランティにも、戸口に立つ制服警官にも目もくれず、タバコを立て続けに吸った。それから、また見取り図を見る。②「パンティ」。女教師マティルデ・クレシエンツァーギのパンティは、壁のヨーロッパ大地図を吊っている二本の掛け釘の片方に引っかけてあった。

「タバコを」マスカランティからタバコを受けとるとき以外、時間の経つのも忘れていた。今度は、カメラマンやジャーナリストを駆り立てていた黒板——気が滅入るだけのポルノグラフィ——を、詳しく見なければならぬ。立ち上がり、タバコをくわえたまま黒板の前まで行く。こんなに吸ったことはなかったし、いつもならタバコは指に挟んでいる。ドゥーカとして生身の人間で、感受性も鋭い方だ。怒りや絶望を紛らわそうと吸っていたが、あまり効果はなかった。黒板を見つめる。左の隅に、半分消えかかっているものの、まだしっかり判読できる単語——アイルランド——が残っていた。女教師マティルデ・クレシエンツァーギが書いたものに違いない。アイルランドは、二日前の夜、すなわち虐殺当夜である火曜の授業内容を示していた。火曜の二コマの授業のうち一つは地理だったのだ。生徒たちは、二日前の夜、アイルランドについて学んだ。女教師は、おそらく独立国アイルランドの成り立ちや、北アイルランド地方がイギリスに併合された経緯を、説明したのだろう。

その夜の授業を生徒らがどれだけ理解したかはわからないが、その深夜、アイルランドという字のそばには男根が描かれ、まわりには、それにまつわるありとあらゆる隠語が書き散らされた。いくつ

かはミラノ方言だが、一人だけ、明らかにローマ出身の子がいたらしく、女性器を表すローマ方言も複数あった。性欲を刺激する部位の名称が網羅され、下手くそな図解が付いていたり、まちがいだらけのスペルで、さまざまな性交渉、特にアブノーマルな行為に駆り立てる文句が綴られていたりする。この病的に乱れた筆跡で埋まった穢らわしく汚らしい黒板の中で、「アイルランド」という邪気のない丁寧な文字だけが、際立って見えた。

⑪「女教師のブラジャー」。黒板の左にある窓の引き手にぶら下がっていた。⑥「スカート」。教室の洋服掛けに、コートやセーターとともに掛かっていた。⑫「片足のストッキング」。机として使われている長テーブル四台のうち二台の間に渡して画鋲で留めてあった。ストッキングを跳び越えて遊んでいたものと思われる。もう片方のストッキングはA教室では発見されなかったため、見取り図にはないが、参照を示す**印があり、「もう片方のストッキングは、生徒の一人であるカロリーノ・マラッシ——故パオロと故ジョヴァンナ・カロリーノの子、十四歳——のポケットから発見」と記されていた。これほどむかつく虐殺の場にいるというのに、ドゥーカはカロリーノという名前に思わず笑ってしまった。父母を亡くした孤児のカロリーノは、若き女教師のストッキング——左右どちらだろう？ バートランド・ラッセルによれば、靴の場合と違って、靴下はどちらが右か左かわからないが、それでも選択公理は定まるといえる——をポケットに入れていた。たぶん、彼自身がガーターベルト——見取り図⑦の「ガーターベルト」は、長テーブルの引き出しの一つに入っていた。いつか使おうと思った生徒が取っておいたのか——から引きはずし、脱がせたのだろう。そして、拷問にかけられた哀れな女教師の脚から抜いたストッキングも、来るべき興奮のためポケットにしまったのか。それをした子の名はカロリーノ。

ドゥーカは床の白い○の間をつま先立ちで歩くようにしながら、一ミリ四方ずつすべてに目を凝らしていき、黒板の後ろで立ち止まった。そこにも別の見苦しい記述がある。タバコを吸い終わるまで、そのまま立ち尽くしていた。

「ランベルティ先生」マスカランティが呼んだ。

暖房が効きすぎた教室内で、その声はキンキン響いた。

「うん？」黒板の後ろで応え、吸い殻を床に投げ捨てた。

「いえ、何でもありません」とマスカランティ。

③黒板の裏にくっつけてあった「女教師マティルデ・クレシエンツァーギの左靴」。何でくっつけたのか？ 見取り図に明示されている。左靴はチューインガムでくっつけてあった。つまり、生徒の一人がガムを噛みながら女教師の靴を脱がせ、噛んでいたガムで黒板の裏にくっつけたのだ。

ドゥーカは、マスカランティや制服警官の視線を浴びながら、A教室の中をくまなく歩きまわり、四つのテーブルの引き出し——中身は全部、鑑識が持つて行って空っぽ——を一つひとつ開けてみた。それから、小さな○の前にしゃがみこんだ。白ペンキで書かれた最小の○は、見取り図の⑬。「スイスフランの五十セント硬貨」。この場所には、スイスフランの小さなコインがあったのだ。いやいやをするように首を振る。といつても、いやと言いたいわけではなく、こんな状況でも自分を保とうとしていただけだ。しゃがみこんだまま、マスカランティに言った。「管理人を」また首を振る。「細君の方だ、夫ではなく」。それから立ち上がり、教壇の方に向かって、今は亡き女教師が休日以外は夜ごと座っていた教卓の椅子に腰かけた。

すぐにマスカランティが管理人の妻の老女を伴い、教卓の前まで連れてきた。年齢には釣り合わない

い少年のような短髪の女だ。

「椅子をご用意して」ドゥーカが言った。

座った女は小さく、怯え、疲れ果てていた。

「授業は何時に始まるのですか？」

「朝は六時半からです」

「何ですって？ 夜間校ではないのですか？」

「そうです」と管理人。「夜には通学できない生徒がいるもんで、六時半から七時半まで一時間だけ授業があるんです。それから、八時には商業やら速記やら簿記やらの生徒が来ます。午後には語学を学ぶ生徒もいるし」

「でも、夜間校ではないのですか？」ドゥーカはタバコを求めてマスカランティに手を伸ばした。

「はい、名称はそうですが、一日中やっています」老女は苛つきながらもきっぱり答えた。

「では、夜は？」とドゥーカ。

「夜は、このA教室だけです」老女は黒板を見ないようにしていたが、あいにく淫らな絵の真ん前に座らされていた。

「この、A教室では何を勉強していたのですか？」

「さあ」老女は、強いミラノ訛りのアクセントで、苦々しく蔑むように言った。「界隈の悪たれに何を勉強させたかったんだか」。この界隈のやっかい者という意味だ。「あのソーシャルワーカーって人たちですよ。知っていなさるでしょう、会計士みたいな黒い革の靴を下げてうろろしている女やら男やら。あの人がロレット広場からランブラーテまでの貧しい家庭をしらみつぶしに訪ねて、子供

をビリヤードなんかで遊ばせてないで、夜間校へ行かせなさいって、ここに送りこんでくるんだ。けど、勉強なんてしやしない、女教師を狂わせるだけなんだから」歯を食いしばり、長い息をついてから続ける。「でなけりゃ、殺してしまうか。で、その後、またビリヤードをしに行くのさ。行けば、年上のゴロツキどももいるから、せいづらに会うためにね」

ギヤルソンのような髪型をした女は、あけすけにしゃべった。

「A教室の生徒は何時に来るのですか？」ていねいにたずねた。

「七時半です」また長く息をついた。老女の脳裏にはまだ、いや永遠に、女教師マティルデ・クレシエンツァーギの姿が焼きついていて、虐殺の直後、真っ先に自分が発見してしまった、黒板の下辺りの床に真っ裸で横たわった姿、青白い蛍光灯の光の下、まっ白な腿の間から血を流している様、そして、全身傷だらけの女教師の呻き声。「けど、いつもそれより前に来ていました」老女は生真面目に説明した。「目的なんかありません。余分に勉強するためじゃない。勉強なんかする気のある子はいませんよ。ただ、十時半になるのを待って、ろくでもないことをしに行くためなんです。だから、早めにここに来て仲間と合流しては、よからぬことを企んでいた。あたしは二度ほど、あの子らが危ないって、分署に訴えたんですよ。けど、お巡りが来てなんて言ったと思いますか？『おれに任せてくれるなら、全員引つ捕らえて鎖につないでおくがね、法律では教育すべきだってことだからな、あいつらはこの学校にいなきゃならんだ』ってね。だから、あたしは言っちゃったんだ。『だけど、あれは悪党ですよ。顔を見てくださいよ、あいつら笑うように簡単に殺しだしてしますよ』ってね。もしたら、こうです。『人を殺したら、牢屋に入れるさ。だが、殺さないうちはここに入れて、勉強させる。法律ではそういう決まりだ』って。で、何が起こったか。あいつらは人殺しをして警察に捕ま

つたけど、かわいそうな先生は死んじゃいましたよ。法律があんな子らを教育しろなんて言うから」辛い現実だがその通りだった。小姓のような髪型の女は、慎ましい表現ながら、この社会の深刻な問題をズバリ言い当てていた。

「しかし、あれだけのことをしていたのに、何も聞こえなかったのですか？」ドゥーカは社会問題には踏みこまずに訊いた。「酔っぱらって暴れたのですから、大騒ぎだったはずですが」

「そりゃ先生が来るまでは、ときどきあたしか夫が、何かしでかしゃしないかと教室に目を配っていました。ある夜なんか、先生が来るよりずっと前にやって来て、女の子を教室に連れ込もうとしたんですよ。夫が警察に通報したから、女の子は解放されましたけどね。あのことがあってから、校長もA教室を閉めようとされたんですが、ソーシャルワーカーの抗議に遭ってね。学校に行かなければ、あの子らは悪事を働くことになるから、辛抱してやってってくれて。で、校長はちよつと気弱な人だから、そのままになったんです」老女は鬱憤にまかせてしゃべった。「二年前にベルガモから来た先生にお会いになるべきでしたよ。ちっさい、ちっさい、まるで修道女のような先生で、修道服みたいな紺色の白い襟のついた服を着ていました。三日しかもたなかつたね。三日目の夜には泣いてあたしのところに駆けこんできたんだから。『校長先生に言ってください。わたしにはもう無理、できません、できないんです』って。校長にもあたしにも、あのクズどもが先生に何をしたかはわかりませんでした。想像はできるけどもね」

ドゥーカは辛抱強く聞いていた。「とても興味深いお話です」。こんな学級は、女性ではなく男性に、生徒を掌握できる外国人部隊の軍曹のような教師に任せればよいと、誰も思いつかなかつたのだろう。想像力の欠如というべきか、あるいは、こういう不愉快かつ困難で低賃金の仕事に身を捧げる男

性教師の不足というべきか。その代わり、この分野には多くの女性が従事している。必要に迫られた者だけでなく、亡くなった彼女のようによくが使命感？——いったい何と呼ぶべきか——に燃えて。「大変参考になります。ただ、わたしが知りたいのは、なぜ物音が聞こえなかったかということなんです。彼らは正気の沙汰ではなかった、机もひっくり返していた。あなたは教室から近いところにいらしたのですか……」

「何も聞こえやしませんよ。一日中、夜の九時までここの通りを走っている車やらトラムやらトラックやらのことをご存じないから」老女はドゥーカの言葉を遮って、きつぱりと言った。「あたしと夫は、台所では大声を上げないと話もできないことだってあるんです」

ドゥーカはうなずいた。確かに、三メートル先にはトラムやトラックが走っている。そんな校舎の一階にある家では、何も聞こえなかったのだろう。「では、事件が起こったことは、どうしてわかったのですか？」

老女は即答した。「九時過ぎに、観葉植物の鉢植えを取り込むため庭に出ました。昼間は外に出しておくんですが、夜はこの寒さだから家の中に入れてるんですよ。夫もいっしょに出ました。重い鉢なんでね。二人で運んで、階段の脇に置いたとき、A教室の明かりが消えていることに気付いたんです。教室のドアの上の小窓からは、暗闇しか見えませんでした」

「明かりが消えていた？」こんなおぞましい場所にいるというのに、ふとサラの小さな顔が浮かんだ。日に日に成長している妹の娘は、ドゥーカに呼びかけるようになっていた。——おいちゃん、おいちゃん、何持ってきてくれたの？——そうだ、あの娘に何か持って行ってやらないと。

「ええ、消えていました。夫は『実習かいな、軒でもかいとるのか？』って。でも、あたしが言った

んです。『気に入らないねえ。見に行つてこようよ』つてね。で、教室に入つて、見たんです」老女はツバを飲みこみ、黒板を見ないよう視線を落とした。

「ありがたいました」ドゥーカはそう言つて老女を帰すと、大小の○からも黒板からも目をそらし、マスカランテイの方を見た。「家へもどろう」すなわち、署へということだ。